

東京大学 文書館ニュース

The University of Tokyo Archives Newsletter

vol. 71, Sep. 2023

Contents

- 2 これまでの10年を、次の10年に
小澤 梓

- 4 明治・大正期学生漕艇競技と
学部スクールカラー考
秋山 淳子

- 6 資料の公開について

- 7 業務日誌（抄）
（2023年2月～2023年7月）

- 8 文書館トピックス
コロナ禍におけるデジタル・アーカイブ充実に向けた取り組み（一件名目録公開を中心に）
井上 いぶき

ホームカミングデイと一般公開 実地開催が再開



10/21に本郷・ホームカミングデイ、10/27～10/28に柏・一般公開の実地開催が再開します。当館の所蔵資料が展示されます。是非足をお運びください。



東京大学文書館
The University of Tokyo Archives

デジタル・アーカイブ にて公開中の件名目録

詳細情報	
階層	特定歴史公文書等 > 事務 > 総合企画部 > 文部省往復 > 文部往復（一）昭和十四年
タイトル	農林省統計資料調査に関する件
年代域	昭和14年2月3日
参照コード	S0001/Mo212/0001
記述レベル	件
資料区分	特定歴史公文書等
資料の規模	1
作成者名称	（差）総長（受）文部大臣
利用条件	公開
取蔵情報	本郷
目録データのライセンス	 PUBLIC DOMAIN

頁数 原議番号	文部大臣	文部次官	官廳名	備考
一 東大二六六	農林省統計資料調査に関する件			
二六 官社一九号	日本精神發揚通商實施に関する件		文部次官	
三八 官社九号	第三十四陸軍記念日行事實施に関する件		同	
四〇 官專三六号	滿洲國開拓総局及地方内務行政関係職員發着集の件		同	
五一 發着二五号	支那時文の取扱に関する件		同	
五二 官社三三号	通關行事等の宣傳運動統制に関する件		同	
六〇 發着七六号	現役又は應召學生の授受等免除等に関する件		同	
六三 官文一〇七号	靖國神社臨時大祭に際し全國民懸賞に関する件		同	
六九 官專二六号	官立文部省附屬醫院等に於ける國民健康保險の件		同	
七六 官社五五号	國民精神總動員新展開の基本方針に関する件		同	

〔画像上〕「文部往復（一）昭和十四年」
「農林省統計資料調査に関する件」
参照コード：S0001/Mo212/0001

当館ではデジタル・アーカイブから発信する情報の充実を図り、簿冊資料の目次に記された件名を採録し、「件名目録」としてデータを整備する業務を行っています。P.8 トピックスでは、コロナ禍におけるこの業務の成果について紹介しています。

これまでの10年を、次の10年に

東京大学文書館 特任研究員 小澤 梓

十年ひと昔などという言葉があるように、10年前という歴史として研究するにはあまりに近いかもしれないが現在とも異なっている。筆者がアーカイブズという概念を知り、アーキビストを志したのが約10年前なのだが、当時は自分が東京大学文書館（以下当館）に特任研究員という形で着任することなど想像だにできなかった。当時と比べるとアーカイブズを取り巻く環境は少なからず変わってきており、特に筆者が着任したデジタルアーカイブ（以下DA）部門は技術環境・社会環境ともに大きな変化の中にある。新任の挨拶にあたり、名刺代わりの研究を提示しえない筆者の10年間の歩みを紹介しながら、当館DA部門がどのように変化したのかを見ていくことで、東京大学文書館で過ごすであろう数年の展望を考えてみたい。なお年代の区切りは筆者の個人的な経験に基づくものであることをあらかじめ断っておく。

1. 2012年～2015年—立志

アーカイブズ学という学問分野があると知った時、筆者は未だ学部生で、外国語学部でモンゴル語を学んでいた。当時の筆者は、それまでの自分を形成してきたものとは異なる価値観を学びたいという漠然とした理由で進学したものの、専門とする学問分野を決めきれずにいた。進路も決まらず悩む中で何か面白い分野の授業はないものかと冊子体のシラバス（電子シラバスの導入により在学中に頒布が中止となった）を文字通り端からめくる中でたまたま目に留まったのが「アーカイブズ学入門」という講義であった。講義を受けて、いくつかの入門書を読んだことで、アーカイブズが持つ力と、それを支えるアーキビストという仕事があることを知った筆者は強い関心を持った。

我流ながらもアーカイブズに関することと、自身の専攻との接点としてモンゴルのアーカイブズについて調べ始めた。地域研究ゼミに所属して取り組んだ卒業論文では清朝支配下のハルハにおける文書の作成に関することをテーマとした。研究を進める中でアーカイブズ学を体系的に学びたい、アーキビストとしてキャリアを歩みたいという思いが強まり、アーカイブズ学専攻を有する学習院大学大学院への進学を決めた。

モンゴルという地域やそのアーカイブズについて学んだことは、その後の研究にも少なからず影響を与えている。近代化の過程でモンゴル国はキリル文字による正書法を採用したが、内モンゴル自治区等ではモンゴル文字を維持したため同じ言葉であっても全く異なる正書法が存在している。東西冷戦下のモンゴル国では研究者による原資料の利用を厳しく制限され、翻刻された資料集は意図的な編集がなされていたことが後年明らかになった。これらは「アーカイブズ機関が資料に関する情報を

どのように持ち、どのように提供・交換していくのか」という大きな課題意識を持つきっかけになった。

さて、同時期の当館がどのようであったかを見てみると、文書館としてまさに新たなスタートを切った時期にあたる。2011年に施行された公文書等の管理に関する法律を追い風のひとつとして、東京大学史料室は2014年に東京大学文書館になり、翌年には国立公文書館等の指定を受けた。開館当初はまだ独自の目録検索システムを持っておらず、大学のウェブサイト内にPDF形式で公開されていたという。デジタル化した資料をいかに提供するかも課題となっていた。開館と同時に設置されたDA部門に期待されていたことは佐藤慎一初代文書館長がニュースレターに書いた通り「保存された紙媒体資料をデジタル化すれば、その利活用範囲が飛躍的に拡大し、学内外のニーズにより迅速に応えられるだけでなく、保存文書に対する多様なニーズを新たに生み出す」¹ ことであつたと思われる。

2. 2016年～2018年—アーカイブズの記述とAtoM

アーカイブズ学専攻に進学した筆者は「公文書館の普及活動」を研究テーマとした。しかしアーカイブズ機関が普及活動をするには、評価選別や編成記述といった業務が適切に行われ、資料が利用可能になっている必要がある。もともと筆者にはアーキビストとして必要な知識や技能を体系的に学びたいという動機もあつたので、研究に直接かかわらない学びの時間も多かつた。

その中でも現在の業務に関わりが深いのが、国際アーカイブズ評議会（International Council of Archives、以下ICA）の国際標準に準拠した、記述とアクセス提供のためのアプリケーションであるAccess to Memory（以下AtoM）を知る機会を得たことであろう。情報技術に関する授業を担当されていた先生の指導の下、実際にアプリケーションを動かしながら理解を深めることができた。また同時期に取り組まれていた科研² にアルバイトとして関わることで実際の活用一端を知ることができた。

当時筆者がAtoMを理解する中で最も印象に残ったのは、ICAが出していた4つの国際標準がひとつのアプリケーションで動くことで提供可能になる情報の広がり、多言語対応に関することだった。当時筆者が持っていたICの国際標準に関する知識はアーカイブズ資料の記述標準であるISAD(G)に関するものが中心で、他の標準に関してはその意義を十分に理解できていなかった。資料の記述はアーカイブズ記述に不可欠であるし、組織歴等を含めた多くのコンテキスト情報をISAD(G)で記述すること自体は可能である。しかしAtoMの中で4つの標準を相互にリンク付けることで、作成者に関

する多様な情報をより分かりやすく提示したり、異なる資料群に横串を通したりということが可能になるのを視覚的に理解することが出来た。この時、筆者は初めて国際標準が4種類ある意味を理解できた気がしたのを覚えている。

当館の歩みに目を向けると、東京大学文書館デジタル・アーカイブの運用が始まったのがこの頃になる。2017年にベータ版が公開され、2018年に本公開がされた東京大学文書館デジタル・アーカイブでは、限られた資源の中でオープンソースのアプリケーションを使い、階層構造を伴う検索システムと画像閲覧提供の両方を実現させている。しかし資料記述の範としているオーストラリアのシリーズ・システムのように資料の記述とコンテキストの記述を分離しリンク付けるような仕組みは未だ実現していない。

冊子やカードといった媒体への記述を前提とした記述の考え方から、異なる記述要素を相互につなげる記述へという変化はICT技術の発展に支えられて今後も進んでいくと考えられる。一昨年には新たな国際標準であるRecords in Context (RIC) の概念モデルの改訂版が出された。アーカイブズ資料そのものが持つ性質は変わらずとも、アーキビストがそれをどう記述し、管理し、利用に供するかは今後確実に変わっていくのだろう。筆者はこの新たな国際標準について十分な理解を得ておらず、今後の課題にしたいと思っている。

3. 2019年～2022年—公文書館での経験とコロナ

学習院大学の博士前期課程を修了後、筆者は埼玉県立文書館（以下県立文書館）の公文書担当の非常勤職員として、公文書の選別や整理といった文書を受け入れてから利用可能にするまでの一連の業務を担当していた。

実務として膨大な、定期的に移管されてくる文書を扱ったのは県立文書館での勤務が初めてであり、あらゆる業務で理論に基づいた実践の難しさを実感する日々であった。特に「目録やデジタル化した資料をどのようにオンライン上で提供するか」という問題以前に「作成時から移管後までの情報をきちんと捕捉する」ことの重要性和難しさを業務を通じて痛感し、関連する勉強会へ参加し始めた。

毎年大量の公文書を受け入れ、目録を公開している県立文書館では1点1点の記述に多くの時間を割くことはできない。文書受け入れ時に受領するフォルダ単位のリストはあったものの、そこに書かれている情報は省略されていることも多く、アーカイブズの記述としては十分ではない所があった。オンラインで提供している検索システムは階層を持たないテキスト検索ベースで、業務や組織に関する知識なしに目的の文書にたどり着くのが難しかった。遡及的な取組みをするには文書の量が膨大で、しかもファイル単位で行う紙の管理とは別に電子文書管理のシステムが存在していた。

加えてこの3年間はコロナ禍によって多種多様なデジ

タルツールが導入され、電子記録の保存がより大きな課題として立ち上がってきた。出勤人数を削減するための在宅勤務が始まり、ペーパーレスや働き方改革と一体となって全庁的な業務の電子化がどんどん進んでいった。

このような事態は埼玉県に限ったことではないだろう。アーカイブズ機関に来る文書は一定期間保存されてから移管されてくるため多少の時間差があるものの、多くの組織アーカイブズが遅かれ早かれ電子記録の長期保存と利用提供という問題に一層取り組む必要が出てくると思われる。国立公文書館等としての側面を持つ当館も例外ではなく、10年前にはいつか将来の課題だったかもしれない「コンピュータ上で作成されたデジタルでしか存在しない法人文書」の定期的な受け入れや保存、利用提供がより現実的な課題となっていくだろう。

4. 東京大学文書館での業務—今後の抱負

当館での勤務が始まって数か月が過ぎた。筆者が今担当している業務は、館員が日々作成する目録記述をインターネット上に公開し、デジタル化した資料を紐づけ、DAを通して広く利用可能にするための橋渡しのなものであると理解している。今後は次々とデジタル化される資料と、少しずつ実績が増えているボーンデジタル文書をどのように管理・保存し利用に供していくかも取り組むべき課題になるかもしれない。資料記述のあり方の変化はそれをオンラインで提供するDAのあり方にも結び付けてくるだろう。

日々の業務に加えて「研究員」として何をすべきか、何ができるのかを考える日々が続いているが、館内外の多くの方と意見を交わしながら、当館がより良いアーカイブズとなるよう努力していきたい。

¹ 『東京大学文書館ニュース』第53号、2014年

² JSPS 科研費 基盤研究 (A) 「国際コンソーシアムによる「原爆放射線被害デジタルアーカイブズ」の構築に関する研究」(研究代表者：安藤正人、課題番号 25244028)

明治・大正期学生漕艇競技と学部スクールカラー考

東京大学文書館 助教 秋山 淳子

1. 「淡青」と「学部を表わす色」

東京大学のスクールカラーといえば「淡青」（ライトブルー）である。この由来は、1920（大正9）年の東京帝大・京都帝大による第1回対抗競漕（レガッタ競技）にある。イギリスのケンブリッジ・オックスフォード両校の対抗競漕にならい、9月23日に琵琶湖で開催された。その際に「抽選により校色を決定したが、本学は淡青、京大は濃青となったので、爾来淡青を以て本学の代表色とした」と『東京帝国大学漕艇部五十年史』¹に記されている。

一方、東京大学の各学部にもスクールカラーというべきものが存在していた。1963（昭和38）年の薬学部教授総会資料には、当時の学部と「表示カラー」が登場する²。議事録によれば、協議事項に「3. 薬学部の表示カラーについて」が提出され、学部長より、学内の運動会当日「一応濃紺を使用」した薬学部「カラーの表示が確定していなかったので、学生部より決定してほしい旨依頼があった」と発言があり、「一同検討の結果臙脂色に決定」したとある。つまり、当時の学内行事では各学部が「表示カラー」を使用する慣例があり、1958年に医学部薬学科から独立した薬学部は未定だったため、学生部に指定を求められる状況だったのである。

その際の資料が「学部を表わす色」一覧である（表1）。各組合せは、学部同窓会等の名称に通じる例がある一方、想定外の色もあるだろう。現在、文書館ではこうした学部スクールカラーの歴史を調査している。今回は、その中間報告として、上記「淡青」に先立ち、学部（分科大学）対抗の漕艇競技に淵源をもつ事例を紹介したい。

表1 1963年時点の「学部を表わす色」

法学部		緑色
医学部		赤色
工学部		白色
文学部		桃色
理学部		樺色
農学部		紫色
経済学部		青色
教養学部	文科	黒色
	理科	黄色
教育学部		橙色
薬学部		「エンヂ色」

結果の「エンヂ色」が鉛筆で記入されている

2. 学生競漕会のはじまり

東京大学の学生漕艇競技は明治10年代前半に始まり、人気の学生スポーツとして浸透していった。1884（明治17）年10月に全学の競技団体「走舸組」が設立され、医法文理4学部による初めての競漕会が開かれた。翌年か

らは春季大会が定例化し、帝国大学改組を経て、1887年4月には第1回東京帝国大学競漕大会を開催、以後毎年4月第2土曜の恒例行事となっていく。また、工学部の前身、工部大学校でも漕艇競技は盛んで、1885年には東大4学部と競漕大会を行い、東大勢をおさえ優勝をさらった。

こうした競漕会は学生スポーツの花形であり、東大も競漕会長を総長が、委員を教員が固め、大学をあげて運営に協力し、毎回10以上の「番組」（レース）を設定、学生の熱戦が繰り返された。とくに大会の最終レース：分科（学部）対抗の選手競漕は白眉であり、毎年各科の威信をかけた激闘となったのである。

3. 競漕会における「旗色」

当時の漕艇競技では、各番組単位でチームに「旗色」がつけられた。もっともオーソドックスな組み合わせは赤／白であるが、同時に数チームが出漕する競漕会では様々な色が登場した。

右の表2は、初期（1885年）のチーム色使用動向を示したものだ。各種レースで出漕チーム分（3～6色）を赤／白／青／紫／樺／桃から適宜選定、使用した状況がわかる。この段階では、レース間で出漕チーム数が同数であっても色構成にはばらつきがあり、最終18番の学部対抗選手競漕は、4学部と予備門旧本費・分費（前年に両費は合併されている）の計6チームが参加、予備門が赤白を使用し、学部は文：青／法：紫／医：樺／理：桃であった。一方、表3の帝大時代をみると、基本の使用色は赤／白／紫と新たに緑の4色に固定され、青と桃が消える。主要3チームの医：赤／工：白／法：緑という旗色は第2回に定まり、残る基本色：紫を文・文理混成が使用した。第4回以降は最終番の選手競漕を医工法3科で競うことになるが、1905年の第19回から、別種目として文農対科競漕が開始される。この際、両科ともどの色を使用するか議論があったようだ。農科は比較的早く使用実績のあった紫にしたが、文科は難航、『漕艇部五十年史』には次のように記述されている。

“海老茶などと云ふ説もあったが、紫と海老茶の競漕などは、何だか女学生の競漕のようだと茶化す人があった為に排斥され、さらば当世流行のオリーブなどとハイカラを云ふ人も有ったが、結局樺と決まった”

その後、1917（大正6）年に文科の不参加により文農競漕は廃止されるが³、1920年の第33回から農科・農学部も紫で学部選手競漕に参加することとし、医工法農による赤／白／緑／紫の4色体制が確立していった。

なお、1923年以降は上記4学部レースのほか、文理経の競漕種目も開始されたが、「旗色」について各種記録に記載がみられなくなる。そのため、この段階で文理経がそれぞれ何色であったのか、残念ながら確認できない。

表2 走舸組春季競漕会のレース別使用色 (1885年4月)

チーム色	レース (番組)																	
	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15	16	17	
赤	●	●	●		●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	●	18: 学部対抗
白	○		○	○		○	○		○	○	○		○	○		○	○ 予備門 旧本曇	
青	●	●		●	●			●	●	●	●		●	●	●		● 文	
紫	●		●		●			●		●		●			●		● 法	
樺	●			●				●				●				●	● 医	
桃		●				●				●				●			● 理	

出典)『東京帝国大学漕艇部五十年史』より作成。

表3 分科大学・学部競漕チーム使用色 (1887～1923年)

回次	1	2	3	4～18	19～28	29～32	33～36
赤	法	医					
白	工						
緑	文理	法					
紫	医	文	文理		農		農
樺					文		

出典)『東京帝国大学漕艇部五十年史』より作成。

4. 「旗色」の定着と拡散

このように明治・大正期から盛んであった学生漕艇競技だが、一般市民の人気もたかく、とくに東大競漕大会は新聞でも毎回大きく採り上げられ、世間の耳目を集めた。また時節柄、会場の隅田河畔は桜吹雪、競漕合間の楽隊演奏も華やかさを添え、学生・教職員・OBのほか、皇太子はじめ皇族や軍人、政界からの来賓、多数の一般観客が押し寄せ、春の帝都一大イベントとなった。

その活況に彩りを加えたのが、この「旗色」である。本来はチームを視認するためボートに取り付ける旗の色だが、レース結果や応援の際には出漕チームをその色で呼称するのが通例である。対抗競漕では、法医工3分科(学部)の色が固定化すると、選手も同色で染め抜いたユニフォームを着用(写真)、各科応援団も盛り上げの手段に戦略的に活用した。工科は「橋場の岸に沿ふて数十艘の小舟を連れ、数百の白旗を振り立て白よ白よと」叫び、「天地も崩るるばかり」⁴、売店で「白薔薇花簪」を製作販売、「ハンカチーフを持回りに来賓に売」る学生も登場し、好評だったようだ⁵。

医科も「何処よりか駆り集めけん数多の小供に小旗を与え」提上に並べ振らせたとある⁶。また、法科は1902(明治35)年に緑会を設立、練習艇「みどり号」を建造して実力の錬成に邁進した。

文農競漕も同様で、初回の様子を新聞は次のように伝える。



写真 第3回大会優勝の法科チーム 帽子もウェアも全身「緑」である

学生たちは「小旗をふり、声のかれるも覚えずに、紫々、或いは樺々と叫び合」い、樺(文)が紫(農)を抜いて勝利すると「文科生一同の喜び」は周囲も驚くほどであったという⁷。

観客の応援も旗色で行われ、その声は「沿岸の鯨波」となり「赤よ、白よ、緑よ、と鼯肩々々に力を添え」⁸大変な盛り上がりであった。こうして対抗競漕の旗色は各分科のチームカラーとして、学内外に広く定着、拡散したのである。

5. 競漕競技と学部スクールカラー考察

学生競漕の「旗色」と分科・学部の組合せでは、医：赤／法：緑／工：白／農：紫に加え、文：樺という構図がみえてきた。そこで再び表1と比較してみると、医・法・工・農学部はこれと合致しており、法・農学部の学部同窓会名称に競漕競技の影響を指摘することができる⁹。一方、文学部は桃色で、樺色は理学部が使用していた。桃・樺色とも旗色の使用色ではあったが、特定の学部色として定着したとは言えないようだ。競漕会最終レースの圧倒的人気うかがえる結果であろう。

現在、薬学部のように部局カラーを明示している例は少なく、1963年との継続性検討も難題である。しかし紙幅も尽きたため、今回は明治からの競漕競技の旗色をひとつの淵源として指摘し、工学部の白色の行方もふくめ、今後の課題としたい。

1 久保勘三郎編、東京帝国大学漕艇部発行、1936年。以下、本文献を主要出典とした。
 2 11月13日開催、第90回薬学部教授総会(「教授会・教授総会議事録 昭和38年」(S0259/SS01/0010))。
 3 当時、文科在籍生が比較的少数であるうえ、卒業論文提出期が4月末であるため3年生の参加が難しいことが棄権の理由であった(『漕艇部五十年史』)。
 4 第6回、『漕艇部五十年史』。
 5 第4回、「東京日日新聞」1890年4月15日。法科は西洋菓子・洋酒の店を出店した。
 6 第16回、「時事新報」1902年4月14日。
 7 第6回、「東京朝日新聞」1905年4月10日。
 8 第11回、「読売新聞」1897年4月12日。
 9 法学部は「緑会」、農学部は「紫友会」である(「東大農学部の歴史・農学部の拡充」(<https://www.au-tokyo.ac.jp/history/history3.html>))。

資料の公開について (2023年2月1日～2023年7月31日)

上記期間内に整理を終え、新たに公開した特定歴史公文書等ならびに歴史資料等は、以下のとおりです。

※概要記述とアイテムリスト(目録)は、当館のデジタル・アーカイブからご確認いただけます(<https://uta.u-tokyo.ac.jp/uta/s/da/page/home>)。

特定歴史公文書等

事務	
S0654	施設部 東日本大震災対応
S0675	大学院問題懇談会
S0684	創立130周年記念事業
S0702	体験活動プログラム
S0703	柏キャンパス各種委員会委員推薦
S0704	サイエンス・パートナーシップ・プログラム(SPP)
S0705	柏キャンパス総合研究棟管理委員会
S0707	大学院制度検討小委員会
S0710	学校基本調査
S0711	秋季学位授与式・卒業式、秋季入学式
S0712	歴史資料等保有施設・国立公文書館等指定・運営
S0713	附属病院RI問題(土壌撤去処理経費関係)
S0714	会計検査院対応
S0715	修士課程学位記授与簿
S0716	課程博士学位記授与簿
S0719	部局CERT責任者連絡協議会
S0720	情報倫理委員会
S0721	復興支援室会議
S0722	教務関係全学規則の制定・改正
S0724	卒業者管理
S0728	安全保障輸出管理
S0731	本部共通施設に係る担当理事等懇談会
S0732	産学協創推進
S0733	グローバル・キャンパス推進室
S0734	日本語教育連携企画
S0735	運動施設・課外体育施設等管理運営
S0736	情報公開委員会
S0738	国際研究型大学連合(IARU)学内会合
S0739	顛末報告書

大学院・学部

S0401	医科学研究所教授会資料
S0649	薬学研究科・薬学部 東日本大震災対応
S0650	経済学研究科・経済学部 東日本大震災対応
S0651	工学系研究科・工学部 東日本大震災対応
S0655	医学系研究科・医学部 東日本大震災対応
S0717	医学図書館運営委員会

S0725	総合文化研究科・教養学部 事件・事故
S0726	理学系研究科学術運営・教育推進委員会
S0727	理学系名誉教授の会
S0729	生物生産工学研究センター 教員会議
S0730	附属生態調和農学機構 運営委員会

附置研究所

S0570	海洋研究所 所内委員会
S0652	生産技術研究所 東日本大震災対応
S0737	ヒト幹細胞臨床研究審査委員会
S0741	分子細胞生物学研究所 東日本大震災関係

全学センター

S0240	空間情報科学研究センター・人工物工学研究センター予算関係書類
S0653	先端科学技術研究センター 東日本大震災対応
S0718	大規模HPCチャレンジ審査委員会
S0723	情報基盤センター ネットワーク専門委員会

附属図書館

S0672	附属図書館連絡会議
S0740	新図書館構想

歴史資料等

総長資料

F0295	菊池大麓関係資料
-------	----------

教員資料

F0022	熊田衛関係資料
F0287	竹内理三関係資料

職員資料

F0167	清水洋美(元庶務部庶務課課長補佐)関係資料
-------	-----------------------

学生資料

F0286	木畑洋一関係資料
-------	----------

既存資料群にもアイテム追加が多くあります。詳細は「東京大学文書館デジタル・アーカイブ」をご覧ください。上記期間中も個人や団体から多数の資料を寄贈いただきました。ありがとうございます。今後も引き続き、東京大学に関係する資料・学内刊行物のご寄贈をお待ちしています。

業務日誌(抄)

(2023年2月～2023年7月)

※(本): 於本郷本館、(柏): 於柏分館

2月1日 元、逢坂、来年度DA改修・Github公開について打合せ
 2月3日 森本、秋山、星野、井上、歴史資料部門打合せ(オンライン)
 2月6日 森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席(オンライン)
 元、第6回東京大学学術資産アーカイブ推進室主催セミナーにて報告(オンライン)
 2月9日 石原尚文様より資料寄贈(F0279 石原資郎関係資料)
 秋山、濱田元総長インタビュー参加(百五十年史編纂室)
 2月10日 元、研究調査国内出張(～2/12)
 環境整備チームによる書架清掃(柏)
 2月11日 森本、逢坂、千代田、オーストラリア調査出張(～2/18)
 2月14日 元、2022年度第2回部局CISO連絡協議会代理出席(オンライン)
 2月15日 秋山、百五十年史編纂室資料調査同行(駒場)
 2月17日 秋山、2022年度第2回部局CERT責任者連絡協議会代理出席(オンライン)
 2月20日 森本、秋山、百五十年史編纂室資料調査同行(本)
 業者による資料移送(本→柏)
 元、科研費関係出張(～2/21)
 2月22日 森本、RRI・ELSIの観点を組み込んだ部局発表参加(オンライン)
 秋山、国立大学協会視察対応(柏)
 2月23日 元、国文学研究資料館基幹研究「アーカイブズ社会の基盤創発に関する基礎的研究」第2回研究会出席
 2月27日 元、令和4年度第1回総合研究棟安全衛生管理専門委員会出席(オンライン)
 元、令和4年度第3回総合研究棟建物管理専門委員会出席(オンライン)
 2月28日 森本、秋山、定量生命科学研究所職員組合資料調査(定量研)第96回館員打合せ(本)
 取蔵庫防虫のためのエアロチ散布(本)
 3月2日 森本、世田谷区公文書管理委員会出席(オンライン)
 3月6日 森本、国立近現代建築資料館運営委員会情報小委員会出席(オンライン)
 3月7日 森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席(オンライン)
 森本、秋山、百五十年史編纂室と打合せ(本)
 3月8日 森本、内閣府公文書管理委員会出席(オンライン)
 3月9日 阿部武司様より資料寄贈(F0298 阿部武司関係資料)
 3月10日 森本、秋山、星野、井上、村上、歴史資料部門打合せ(オンライン)
 3月12日 元、研究調査外国出張(～3/19)
 3月13日 吉見俊哉様より資料寄贈(F0299 吉見俊哉関係資料)
 専門業者による資料劣化状態調査(本・S110室)
 3月14日 照沼康孝様より資料寄贈(F0218 照沼康孝寄贈資料)
 森本、国立公文書館アーカイブズ研修Ⅲ修了論文審査委員会出席
 3月15日 森本、文書・図書・モノのリスト化検討WG出席(オンライン)
 3月17日 653室に書架設置(柏)
 3月22日 森本、埼玉県「次期文書管理システム構築業務」調達に係る第1回総合評価審査委員会出席(オンライン)
 秋山、百五十年史編纂室資料調査同行(教養学部教務課)
 3月24日 佐志原圭子様より資料寄贈(F0277 公開講座受講資料)
 3月27日 森本、防衛研究所戦史研究センター研究会出席
 国立大学協会より資料寄贈(F0269 国立大学協会関係資料)
 3月28日 第97回館員打合わせ(柏)
 シリーズ・システム研究会(柏)
 3月30日 元、OmekaSモジュールのGithub公開について打合せ
 3月31日 逢坂裕紀子特任研究員退職
 取蔵庫防虫のためのエアロチ散布(本)
 4月1日 小澤梓特任研究員着任
 SB06室運用開始(本)、166室運用開始(柏)
 4月3日 森本、秋山、百五十年史編纂室資料調査同行(農学部)
 小松美樹様より資料寄贈(F0300 小松彦三郎関係資料)
 4月5日 元、韓国大邱市寿城区より柏分館視察対応
 4月6日 森本、元、韓国大邱市寿城区より本郷本館視察対応
 4月19日 環境整備チームによる書架清掃(柏)
 森本、秋山、百五十年史編纂室と打合せ(本)
 4月20日 森本、部局女性人事加速5カ年計画意見交換会出席(オンライン)
 4月21日 業者による、昆虫調査のためのトラップ設置(5/23回収)(柏)
 4月24日 森本、内閣府公文書管理委員会出席(オンライン)
 森本、秋山、法学政治学研究所新田一郎教授と石井紫郎元法学部教授資料保存について打合せ(オンライン)
 4月25日 第98回館員打ち合わせ(柏)
 取蔵庫防虫のためのエアロチ散布(本)
 森本、元、秋山、小澤、逢坂裕紀子氏(GLOCOM)と教員人名DB打合せ(オンライン)
 4月26日 森本、東京都公文書管理委員会出席(東京都庁)
 4月27日 資産活用課文書調査および移管作業(駒場Ⅱキャンパス)
 5月2日 東大闘争資料収集委員会より資料寄贈(F0293 東大闘争資料収集委員会関係資料)
 5月9日 炭酸ガス燻蒸開始(柏)(～5/23)
 5月10日 戸井田良晴様より資料寄贈(F0301 戸井田盛蔵関係資料)
 5月11日 森本、元、秋山、小澤、逢坂裕紀子氏(GLOCOM)と教員人名DB打合せ(オンライン)

5月12日 秋山、令和5年度第1回一般公開担当者会議出席(オンライン)
 森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席(オンライン)
 5月15日 S110・SC105室のデータロガー2台を地下取蔵庫SB06室に移動(本)
 業者による学務課移管予定文書燻蒸(～5/19)(本)
 5月16日 令和5年度予算第3次配分ヒアリング(オンライン)
 5月17日 定量生命科学研究所職員組合より資料寄贈(F0278 定量生命科学研究所職員組合資料)(柏)
 5月19日 森本、秋山、星野、井上、村上、歴史資料部門打合せ(オンライン)
 除湿機湿度検知器の基準湿度を55%に設定(柏)
 5月20日 森本、秋山、石井紫郎元法学部教授関係資料調査・寄贈受入(～5/21)
 5月24日 森本、元、秋山、小澤、逢坂裕紀子氏(GLOCOM)と教員人名DB打合せ(オンライン)
 5月27日 元、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会近畿部会出席(司会)
 5月30日 第99回館員打合わせ(本)
 森本、元、千代田、小澤、DA将来構想案検討打合せ(本)
 秋山、近代日本法政史料センター原資料部視察受入れ(本)
 5月31日 取蔵庫防虫のためのエアロチ散布(本)
 6月2日 全取蔵庫空調稼働開始(ドライ、25℃)(柏)
 166室除湿機稼働開始(柏)
 森本、京都大学研究資源アーカイブからの来訪対応(本)
 6月5日 閲覧を通常体制に戻す
 全取蔵庫除湿機稼働開始(柏)
 元、小澤、Google Analyticsについて打合せ(オンライン)
 6月6日 令和5年度第1回文書館運営委員会(オンライン)
 全取蔵庫空調稼働開始(ドライ、25℃)(本)
 6月7日 駒場Ⅱキャンパス資産活用課からの移管文書クリーニング(柏)
 森本、村上、環境調査のため教育学部図書見学
 6月8日 森本、元、千代田、小澤、渋沢史料館視察
 6月9日 秋山、令和5年度全国公文書館長会議代理出席(オンライン)
 森本、世田谷区公文書管理委員会出席
 秋山、令和5年度第2回一般公開担当者会議出席(オンライン)
 6月12日 資料寄贈(F0139 南原繁関係資料)
 6月14日 森本、研究インテグリティ学内説明会出席(オンライン)
 業者による、昆虫調査のためのトラップ設置(7/14回収)(柏)
 6月16日 森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席(オンライン)
 6月20日 第100回館員打合わせ(柏)
 森本、元、千代田、小澤、DA将来構想案検討打合せ(柏)
 SB06室環境確認のため、国立歴史民俗博物館高木真紀氏来館(本)
 6月21日 榎本則子様より資料寄贈(F0302 石井保二関係資料)
 森本、2023年度第1回部局CERT責任者連絡協議会出席(オンライン)
 森本、秋山、百五十年史編纂室と打合せ(本)
 SB06室にデータロガー2台設置(本)
 6月22日 森本、元、秋山、小澤、逢坂裕紀子氏(GLOCOM)と教員人名DB打合せ(オンライン)
 元、アルバ編集会より資料寄贈(F0271 東京大学アルバム編集会関係資料、F0025 史料室アルバム)
 6月23日 森本、資料劣化相談対応のため近代医科学記念館訪問
 元、2023年度第1回部局CISO連絡協議会代理出席(オンライン)
 6月27日 SB06室環境確認のため、経済学部資料室講師小島浩之氏来館(本)
 2023年度前期消防設備定期点検(柏)
 元、科研費関係外国出張(～7/3)
 6月28日 佐藤館長、吉井担当課長、森本、文部科学省・里見朋香審議官を寄附のお礼および使途報告のため訪問
 室内外の温度差による結露防止のため、SC105室の温度設定を変更(本)
 6月29日 2023年度前期消防設備定期点検(柏)
 6月30日 森本、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会役員会出席(オンライン)
 取蔵庫防虫のためのエアロチ散布(本)
 7月3日 166室、暗幕設置工事(柏)
 7月7日 秋山、令和5年度第3回一般公開担当者会議出席(オンライン)
 7月10日 元、令和5年度第1回総合研究棟建物管理専門委員会出席(オンライン)
 7月13日 166室、密集書架設置工事(柏)
 7月14日 森本、世田谷区公文書管理委員会出席(オンライン)
 7月18日 森本、元、秋山、千代田、小澤、逢坂裕紀子氏(GLOCOM)と教員人名DB打合せ(オンライン)
 7月19日 森本、秋山、百五十年史編纂室会議陪席(オンライン)
 元、アーカイブズカレッジ出講
 7月20日 業者によるカビ・化学物質調査(柏)
 元、小澤、OmekaS改修作業打ち合わせ(オンライン)
 塩見弥一様より資料追加寄贈(F0288 塩見弥一関係資料)
 7月21日 森本、アーカイブズカレッジ出講
 7月24日 森本、内閣府公文書管理委員会出席(オンライン)
 7月25日 第101回館員打合わせ(本)
 森本、元、千代田、小澤、DA将来構想案検討打ち合わせ
 7月26日 業者による資料移送(本・柏)
 7月27日 森本、筑波大学アーカイブズおよび筑波大学朝永記念室に出張
 7月28日 森本、ハラスメント予防担当者連絡協議会出席
 7月31日 森本、全国歴史資料保存利用機関連絡協議会総会出席
 取蔵庫防虫のためのエアロチ散布(本)

文 書 館 ト ピ ッ ク ス

コロナ禍におけるデジタル・アーカイブ充実に向けた取り組み - 件名目録公開を中心に -

コロナ禍の影響により当館も業務上の制限が掛かっていましたが、2023年6月5日から通常業務体制へと戻りました。今回は当館がコロナ禍において取り組んだ業務の内、件名単位の目録（以下、「件名目録」）と件名ごとに紐づけされた画像の整備、そしてこれらのデジタル・アーカイブへの公開に向けた業務に焦点を当て、その成果を振り返りたいと思います。

簿冊資料の目次から件名目録を作成し、件名ごとに紐づけされた画像を公開することは、学術資産等アーカイブズ事業の一環としてコロナ禍以前から進められていた業務で、「文部省往復」(S0001)はその対象でした。コロナ禍でも学術資産等アーカイブズ事業でのこの業務は続き、「文部省往復」では2020年度分として新たに簿冊39冊分、全1444件(S0001/Mo209～S0001/Mo237)の件名目録と紐づけされた画像を新規公開しました。同様に、2021～2022年度にかけて「官庁往復」(S0003)の簿冊60冊分、全7119件(S0003/0001～S0003/0060)、2022年度に「諸向往復」(S0004)の簿冊3冊分、全871件(S0004/01、S0004/03、S0004/04)を新規公開しました。

また、既に公開されていた「文部省往復」の件名目録と画像について、当初十分な確認の時間が取れないまま情報掲載せざるを得なかった結果、目録情報の採録ミスや目録と紐づけされた画像のリンクの誤りが残されていたことから、コロナ禍で在宅勤務になったのを機に、館員全員で再確認と修正作業を行いました。このことは件名目録作成やその目録情報の確認、画像の紐づけといった作業の精度を上げるにはどうすべきか、全体でその工程を再検討するきっかけとなり、デジタル・アーカイブから発信する情報の正確性の向上に繋がりました。学術資産等アーカイブズ事業以外でも件名の採録と目録の整備に取り組み、「学内往復」(S0005)の件名目録が新規公開された他、「検印録」(S0007)、「職員進退」(S0018)などはデジタル・アーカイブには未公開ですが件名の採録が大幅に進みました。後者の成果は、近い内に具体的な形で公開できるよう準備を進めていきます。

コロナ禍においても当館デジタル・アーカイブから発信する情報の充実を図ることが出来ました。今回取り上げた業務は、通常業務体制に戻った今後も継続して進めてまいります。

(井上いぶき)

東京大学文書館ニュース 第71号

ISSN 0915-3284

発行日：2023年9月30日（年2回発行）

編集・発行：東京大学文書館

〒113-8654 東京都文京区本郷7-3-1

電話：03(5841)2077(直)

<https://www.u-tokyo.ac.jp/adm/history/index.html>

印刷所：松枝印刷株式会社